

# 子育て支援が拓く新しい世界

—団地に於ける子育て支援・あっぷるはうすの取り組み—

KSP 関西大学  
戦略的研究基盤  
団地再編  
リーフレット  
-Re-DANCHI leaflet-

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業  
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

MAY 2014 VOL. 154



## あっぷるはうすの活動事例

### はじめに

少子高齢化社会を迎えた我が国では、親の子育て力が低下し、今後の子供たちが本当に豊かな暮らしができるかが問われている。こうした状況に対して、子育ての社会化が始まり子育て支援が喧伝されるようになった。

様々な支援の中、子育て活動そのものに対する支援を期待する現代の親は特に、キッズルームや、親身に話を聞いてくれる人、子育て情報に触れたり、専門家に相談できる場所や機会である。

### あっぷるはうすによる子育て支援

NPO 法人大阪国際文化協会 (OIC) は少子高齢化支援活動として、団地で子育て支援施設である「あっぷるはうす」を運営している。ここでは、新しい子育て支援モデルを作ることをビジョンとして、親の子育ての負担を軽減するだけでなく、親子の成長のため、また親自身をエンパワーメントし、親が自己成長するための様々な活動を展開している。

また地球規模での多文化と日本の伝統を大事にする地球人を地域で育てること、自然と共生すること、世代間交流を図ることを理念として、子育てに限らず、行政や

UR 都市再生機構 (以下 UR) や、地域住民と協働しながら、多様なコミュニティ活動を展開している。

団地には、事業や活動に寄与するソーシャル、フィジカル、ナチュラルの三つの資源があり、これらを活用することができる。ソーシャル (社会的) 資源とは、親子サロンや、高齢者グループなど、既存の集いである。フィジカル (物理的) 資源とは、子育てセンターなどのハードウェア、ナチュラル (自然) 資源とは、団地が有する優れた自然環境である。

### 子育て支援から広がる新しい世界

子育て支援のような“集い事業”は、住民に対して、多様なニーズに合わせた支援や、費用対効果の高いサービスを提供することができる。また住民のエンパワーメントに寄与し、住民同士のコミュニケーションを高めることができる。

また団地に対しては、若手居住者を引き付けるインセンティブになり、新しい団地ライフの開発、地域内での雇用を提供することができる。

あっぷるはうすの事例が他の地域へと波及することで、他団地の変革を期待する。



## 1. 子育て支援が喧伝される時代背景

日本は少子高齢化社会を迎え、これから生れてくる子供たちが本当に豊かな暮らしができるかが大きな問題となっている。

また親世代には、きちっとした子育てとは何かという、子育て力、保育力が継承されておらず、子供の虐待も増えている。

こうした状況に対して、子育ての社会化が始まったと考えられる。

## 2. 親が期待する子育て支援

マクロの支援として、第一に経済的支援がある。若い世代は、経済的問題から2人目以降をつくらない。

第二は育児と仕事の両立支援である。約6割の女性が出産、子育てのために仕事を辞めている。保育サービス、再就職支援といった支援である。特に就労中や就労を希望する母親は、両立支援としての多様な保育サービスを要望している。

第三は子育て環境の向上である。豊かな自然環境、高い住宅性能、安全性、保健・医療に対する安心感、さらに豊かで多様な人間関係が望まれている。

一方、ミクロの支援として、子育てで行動そのものに対する支援がある。特に専業主婦(パートを含む)は、子育て行動への支援を求めている。

キッズルームや、親身に話を聞いてくれる相談相手、家族への支援、子育て情報に触れたり、専門家に相談できる場所や機会を求めており、また幼児教育に対する要望も強い。

本リーフレットでは、政治や社会構造なしで実現不可能なマクロ支援を念頭には置きつつも、ミクロ支援が中心になる。

## 3. よい子育ての実現に向けた支援

よい子育てとは、負担感を持たず、充実感や喜びに満たされたものであり、その実現に向けた支援として、以下が挙げられる。

①遊び空間、相談や学習の場、有益

な情報に触れる場を作ること

②親や子の緊急援助をすること

これは虐待、ネグレクトやその寸前の親子を行政に繋ぐことである。

③親同士の交流の場、親身に考えてくれる人がいる場、親を専門家グループや、教育につなぐ場を作ること

④再就職支援など、母親の就労につながる支援を行うこと

またこの支援には、団地の持つソーシャル、フィジカル、ナチュラルの三つの資源を活用することができる。

ソーシャル(社会的)資源とは、親子の集いやサロン、高齢者グループなど、既存のさまざまな人の集いである。フィジカル(物理的)資源とは、子育てセンターなどのハードウェア、ナチュラル(自然)資源とは、団地の優れたチャームポイントとなっている自然環境である。

## 4. あっぷるはうす

大阪国際文化協会(以下OIC)の活動は、留学生に対して衣類などをリサイクルするボランティア活動を起源として1983年に始まった。

OICは、アメリカの高齢者生活支援の視察をきっかけとして、NPOのミッションに少子高齢化支援活動をとり入れ、“心温かく美しい人生を作る人々ネットワーク”をつくり、様々なボランティア活動を始めた。この延長にあっぷるはうすがある(図1)。

あっぷるはうすは、子育て基金(愛子様基金)の助成をきっかけとして始められた事業である。UR旭ヶ丘団地内(豊中市)の狭い集会所を使って「狭いながらも楽しい第2のわが家、もう一つの実家」をつくる活動から始まった。子育て基金の助成は2年間で終了したが、豊中市による助成が継続している。

## 5. あっぷるはうすのビジョン

あっぷるはうすのスタートにあたり、以下のビジョンが作られた。

①子育て支援の新概念を創出し、子育て支援モデルを作る

親の負担を軽減するだけでなく、親子の成長のための事業、親自身が自己成長するための事業を行い、新しい子育て支援モデルを作る。

②第一(行政)、第二(企業)セクターとの協働モデルを開発する

行政(豊中市など)とUR、NPOの三者が協働する事業モデルを作る。

③多様なコミュニティ活動を展開する  
心温かく美しい暮らしを実現するため「あっぷるはうすを種子として様々なコミュニティ活動を開花させる」コミュニティ活動を展開する。

## 6. あっぷるはうすの運営手法

あっぷるはうすでは以下の手法により運営している。

①個性と特徴による差別化

「地域で育つ素敵な親、みんなで子育て」をキャッチフレーズにするなど、組織の個性と活動の特徴を作り、他との差別化を図っている。

②理念に基づく運営

あっぷる理念(後述)に基づいて運営している。これは単なる癒しや手助けの拠点ではなく、親子の理想の暮らしを追求する場、子供と共に新しい暮らしを開く場をつくることを意図したものである。

③新しい雇用形態の導入

スタッフの継続性を担保するために、活動は無償のボランティアではなく新しい労働形態、もう一つの働き方としてのNPO雇用としている。

④親の参加(表紙写真左下)

親に当事者意識を持たせ、エンパワメントし、自己成長させることを意図したものである。

⑤地域住民との協働



図1. あっぷるはうす

地域性を重視して地域住民と協働する。ただし団地住民だけではなく、外部の人を入れ、自らの活動への客観的視点を持つことが必要である。

#### ⑥あっぷるイメージの創出

若い人(ビジュアル世代)に合わせて、あっぷるはうすのイメージや、アイデンティティを定着させるために、室内のカラーやデザインの統一性を重要なファクターの一つとしている。率直(フランク)で、品性が高い(エレガント)をキーワードにしている。

### 7. あっぷる理念とその具体化

#### 7.1 あっぷる理念

あっぷるはうすでは以下の理念の下で活動している。

##### ①地域で育つ地球人

「視点はグローバルに足元の活動はローカルに」を意識して、地球上の多文化と、日本の伝統を大事にする複眼的な視野を備えた地球人を地域で育てること。また男性と女性が同じように働く、男女協働社会をつくること。

##### ②心温かく、美しい暮らし

自然と共生していくこと。また世代間交流、特に高齢者と若い人が一緒に行動すること。

#### 7.2 理念の具体化

地域で育つ地球人の理念の具体化として、多文化子育て支援センターをつくり、大学や研究機関と、さまざまな国際交流事業を実施している。

あっぷるはうすでは、外国文化との交流イベントを開催したり(表紙写真右上)、外国人スタッフが活動している(図2)。



図2. 外国人スタッフの活躍

また子供が小さい時にゲストとして来た母親が、子の成長後にスタッフとしてホスト側にまわるという循環型子育てモデルをつくっている。ゲストだった親がホストとなることで、親をエンパワーメントすることを意図している。さらにスタッフとして働くことが、労働への啓発と誘導となり、将来のキャリアのOJTとなることを意図したものである。

心温かく美しい暮らしの理念の具体化として、あっぷるガーデン(図3)をつくり、大阪の伝統野菜や秋、春の七草、ゴーヤなどを栽培している。また使わなくなったおもちゃなどはリサイクルしている(図4)。

名札やコスチューム、看板、イス、クッションなどはスタッフの手作りである(表紙写真左上)。さらに料理や菜園が得意な高齢者をスタッフに加えている。

### 8. 親支援プログラム

あっぷるはうすでは、親を支援するプログラムとして以下を実施している。

##### ①親大学(表紙写真右下)

自己成長を促す活動として、女の生き方、親の生き方を勉強する。

##### ②健康クエスチョン(図5)



図3. あっぷるガーデン



図4. おもちゃのリサイクル

普段から医者、看護師、臨床心理士などに直接話を聞ける場をつくる。

##### ③父親参加、育メン講座(図6)

父親も参加する子育てプログラムである。

##### ④子供の保育啓発

今の子供には兄弟がいないことが多いので、子供に赤ん坊を抱かせたり、一緒に遊ばせたりする保育体験の場を設けている。

##### ⑤保育事業とファミリーサポート

高齢者が子供を預かって面倒を見るファミリーサポート事業との連携を模索しているが、行政上の問題から実現していないのが残念である。今後の課題である。

##### ⑥ハッピーチャイルド(図7)

現代の若い親とその子どもたちが、病気や障害の子どもたちに1歩手を差し伸べるための教育として、チャリティコンサートを行うプログラムである。またこれは、ささやかな募



図5. 健康クエスチョン



図6. 父親参加



図7. ハッピーチャイルド・コンサート



金活動を通じて、グローバル社会の共通文化であるクラシックへの耳を養うことも目的の一つとしている。

## 9. 子育て支援から広がる新しい世界

OICでは、子育て支援から以下の事業を発展的に展開している。

### ① グローカルはうす (図8)

第3の働き方の展開を目的として、放課後学童預かりと、文化サロンを組み合わせた事業を展開している。

学童保育が終わった5時以降の2時間、大人の趣味 & 子供のお稽古教室(落語、囲碁、生け花、アート、英語など)を開催し、特技の保持者の就労と、学童保育を行っている。

### ② 楽農事業

あっぷるガーデンで野菜を栽培し、野外コンサートを合わせて収穫祭を開催している。

### ③ 居住高齢者のための福祉事業

歌声広場や、健康カフェ、電話による話し相手「りんごだより」などの事業を展開している。

### ④ 再就職事業

あっぷるはうすのアドバイザー制度や、外国人のためのハローワーク等の再就職事業を行っている。

### ⑤ F-はうす

外国人と留学生の住宅サポート事業や団地留学を展開している。

### ⑥ 今後の事業

今後の事業としてベビーシッターなどの保育サービス事業、ハンディマン(よろずや的生活サポート)、家事代行などの団地生活向上事業を目指している。

## 10. 集い事業の組織マネジメント

以上 OIC の 10 年間の実績を述べた話から理解されたと考えるが、子育て支援等の集い事業は、ビジョンと組織マネジメントの確立が成功の鍵である。必要なことを以下にまとめる。

### ① 展開、組織、人材等

恒常的な予算確保と、人件費捻出のための事業が必要である。事業は助成金事業と、自主事業を合わせて展開するのが効果的である。

また組織として自覚、構成力、社会的責任を持つ必要から、運営する主要人材の確保が重要である。

さらに活動拠点の確保、対外的アピールとメンバーの意識向上を目的とした広報、自治体や保育所など既存の組織と良い関係およびネットワークを作ることが必要である。

### ② 活動内容充実と将来ビジョン作成

独自の理念とプログラム、運営手法で、他との差別化、魅力付けを図り、活動内容の充実を図る必要がある。

また活動を客観的に評価する指標を開発し、指標に基づく将来ビジョンを描くことが必要である。一般的に集い事業は参加者数で評価される。参加者数を増やす将来ビジョンをつくらなければならない。

### ③ マンパワーとボランティア精神

ボランティア精神があり、自発性、使命感、創造性、当事者性のある人材をリーダーとする必要がある。

30年以上ボランティアをリードし

てきた自身の経験から、従来の無料奉仕的ボランティアでは供給側、受け手側双方に甘えや軽視が発生する。特に少子高齢社会を支えるためには女性労働が重要な役割を果たす今後の日本では無料ではよい人材が確保できず、子育て支援活動の質と継続性が担保されない。

一般的な常勤雇用ではなくても、NPO 雇用を掲げる OIC 方式のように第3的雇用の仕方をマネジメントに採り入れ、しっかりとした人件費の裏付けのもとに良い人材を確保すべきである。それが次世代をつくるよい子育て支援を生み出すと考える。

### ④ 団地の場合 -UR との協働モデルの確立

優れた資産を持っている UR との協働モデルを確立する必要がある。

## 11. 集い事業が親子、団地にもたらす利点

親子に対しては、地域事情に応じたニーズを組み込んだ支援や、費用対効果の高いサービスを提供することができる。また親のエンパワーメントに寄与し、団地居住者同士のコミュニケーションを高めることができる。

団地に対しては、若手居住者を引き付けるためのインセンティブになる。また団地内のコミュニケーションを向上させる効果と、安全・安心効果、新しい団地ライフの開発、地域内での第三の働き方の提案につながる。

あっぷるはうすは今なお、旭ヶ丘団地の価値をつくる努力を続けており、この成功例が他の地域へと波及することで、他団地の変革を期待する。



図8. グローカルはうす (囲碁教室)

## 『子育て支援が拓く新しい世界

—団地に於ける子育て支援・あっぷるはうすの取り組み—

レクチャー：高橋叡子 (NPO 法人大阪国際文化協会)

作成協力：保持尚志 (関西大学大学院博士後期課程)

(講演:2014年3月9日、於男山公民館)

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23年度~平成27年度)」によって作成された。

発行：2014年5月

### 関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)

URL : <http://ksdp.jimbo.com>